
冬の訪れ白蛇

青山 黒美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の訪れ白蛇

【Nコード】

N6982S

【作者名】

青山 黒美

【あらすじ】

秋の夕暮れ白蛇
の続き

「おゝい、居るか」

玄関から少し、しゃがれた声……。

「はい」

戸を開けると、そこには品田のオヤッサン。

「さみくな……おい」

「ええ……」

品田のオヤッサンの頭や肩の上には、白い雪の粉が付いていた。

「親父さん、元気か？」

「相変わらずです。食べるには食べるんですが……寝たきりです」

「そおか……実は話があつてな。お前さんに」

「俺に？」

「ちよいと、邪魔するよ」

品田のオヤッサンは雪を払い、上がり込む。

「あつ、父は今、寝ていて……」

品田のオヤッサンの目は、何時もの品田のオヤッサンの目ではなかった。神妙な目付き。

「二人で話せる部屋ねえーか？」

「じゃあ、俺の部屋で……」

六畳半の部屋。品田のオヤッサンと俺は、小さな豆電球の下に対座した。

「おい。白蛇の話、覚えてるか？」

品田のオヤッサンの口から白蛇と言う言葉が出た時、困惑した。白蛇の事などスッカリ忘れていたし、こんな夜遅くに来て白蛇の事だなんて……考えにも及ばなかった。

「……あゝ、覚えてます」

「オレさ、さつき居酒屋行ってきたんだよ」

「ええ」

「そしたらな、その黒田くろだが言うんだよ」

「黒田……居酒屋の亭主でしたっけ？」

「そうだよ！その黒田が言うんだよ。こないだの女は美人だったな
ゝって」

「女？」

「ああ。実はな、オレ、そんな時の事あんま覚えてねーんだ。ベロン
ベロンでよく。で、思い出してみると確かに居たなど。だんだん思
い出したよ」

「はい」

「で、まあその話をしてるとな、奇妙なんだよ」

「奇妙？」

「ああ、黒田の話によるとな。オレ、白蛇の話をしたらしいんだ。
しかも大声で白蛇の歌を歌ってたらしい」

「白蛇の歌……」

「肌は白いよ、美人さんゝってさ。そしたら」

品田のオヤッサンは、そこで間を置くと、薄暗い部屋に無音が鳴り
響いた。

「続きは？続きは歌わないの？」

品田のオヤッサンは、高く囁く声。女口調で言った。

「続き？」

俺がそう言うのと、目を真ん丸にして品田のオヤッサンは声を張り上
げる。

「続きがあるんだよ！」

「品田さん」

「すまねえ……親父さん寝てんだよな」

「すいません」

「それでな、女が唄ったらしいんだよ。黒田の奴が覚えててよ。ちよっと歌うから聞いてくれ」

品田のオヤッサンは囁く様に歌う。

「私はゝ此処でゝ人間様をゝ。代わりのゝあの子はゝ白蛇にゝ。私のゝ……………」

そこまで歌うと、品田のオヤッサンはピタリと一点を見つめたまま固まってしまった。

「品田さん? ……」

「……………」

まるで蠟人形の様子に固まっている。薄暗いせいもあって、品田のオヤッサンの瞳は影が射し見えない。

「品田さん? ……品田さん!」

品田のオヤッサンの口元が僅に動き、声が漏れる。

「……………忘れた……………続き忘れた」

一気に体の力が抜けてしまった。常なら笑ってしまう所かもしれないが、この場の雰囲気がそうもさせなかった。

「忘れたって歌ですか?」

「ああ、忘れちゃった。思い出せねえ。けどな、黒田の話は覚えてる」

「話?」

「女がな、歌った後に黒田が聞いたんだよ。その歌は誰から聞いたんだい? ってさ。そしたら祖母から幼い時に聞かされたらしい……………」

「……………で?」

「生け贄の女は殺されてない」

この時、悪寒が全身に走った。何か自分の身に危険が伴うんじゃないかと予感する様に。女は殺されていない。生きていた。これが自分にとって、何故、恐怖に感じるのか……白蛇の目を思い出していた。

「……殺されてない？」

俺は恐怖から一刻も早く逃げる為に、品田のオヤッサンの話を促した。

「その女が言うには……これも祖母から聞いたらしい……生け贄にされた女は別の女。霊媒師と生け贄に選ばれた女は手を組んでいた。殺されたのは別の女……」

ガタ！

窓から音がした……一瞬の事だった……俺は暫く窓を凝視していた。

「おい、どうした？」

品田のオヤッサンの問いに窓を見ながら心無しに答える。

「……いえ、なんでも」

品田のオヤッサンが帰った後、俺は布団の中で考えていた。

何が何だか分からない。この話に自分が関係しているのは、白蛇を見たと言う事だけ。

生け贄は別の女？

居酒屋に居た女は一体？

俺は毛布にくるまる。

あの後、品田のオヤツサンが話した言葉が頭の中から離れない。

「お前の名前を言ったらしい。居酒屋の女が」

そして、窓に見た影……人影に見えた。

雪は解け 春が来る

季節 幾度も

巡るとも

月の一夜と

知ればこそ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6982s/>

冬の訪れ白蛇

2011年10月8日11時02分発行